

動物園は楽しい！

司会 旭山動物園は、相変わらずの人気ですね。

川那部 私も遅ればせながら、この6月にやっと見に行きました。この対談もあることですね(笑)。とにかく、見ていて楽しくなりました。

小曹 動物園というのは、とにかく楽しい場所です。それは間違いないと思います。ただ、だから「遊びに行く場所だ」と決めつけているようです。ところが動物のほうは、人間が期待しているようには、なかなか遊んでくれない。だから、極端な場合は例えば石をぶつける。棒でつつく。相手の動物がぱっと逃げる。面白がって、またやる。こうしてやっと、遊んで貰っている気になっていたのではないかと思うのです。

川那部 なるほど。ホッキョクグマなどは、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、せいぜいが遠いところで往復運動をするぐらいでしたね。そうすると、もつとそのクマらしい他のこともして欲しくなる。その点、おたの動物は、近くまで来るし、活発に動いていますね。

動物をじっくり見ると...

小曹 近くにみると、目の動きも見え、さまざま細かなことがよく見えるのですよ。ペンギンは、遠くから見るとつ

つとしていて、羽があるようには見えない。けれども近くで見ると、当然ながら一枚一枚の羽が見えます。それに気付く人が出て来て、そういう人たちは、ペンギンにそこにおいてほしいから変なことはいない。下手な手出しをすると、池のほうへ自分たちで行ってしまつて、ほとんどいなくなる。

いたずらをやつてしまつた人がいたら、うちの展示はそもそも成り立たないのです。例えば、頭の上にヒヨウがいるときに、みんなが金網越しに傘で腹をついたら、あそこに行かなくなりませう。川那部 それをじっくり見ていると、それぞれの動物が、その動物らしく生きている、動いているということ、人間のほうもぱっと感じられるというわけですね。

小曹 それに、生きているということは、すべては予測できないということ。ホッキョクグマがたまに、手をつくべきところがちよつとずれることがある。そうすると、ズルッとよろける。それを見て客は、わっと喜ぶのです。精巧な機械ができて、スイッチを入れたら、ほんとうにそのとおり動くような仕掛けをつくつたとしても、何回か見ていたらそのパターンが頭に染み込みます。そうすると、次はこうなるその次はああなると、前もつて判つてしまいます。それは全然面白くないですよ。この

動物は目が輝いているね」などという会話も、よく聞かれます。別にとくに輝いているわけではないんでしょうが、生き生きしているという印象を受けとるのでしよう。

繰り返しで見ると...

川那部 次にはどう動くか、どういうことをするか、見に来る人にもだんだん、見当がつき始

館長対談

動物が「幸せ」な展示

2006年8月18日(金) 琵琶湖博物館館長室にて

司会進行 / 布谷知夫

琵琶湖博物館館長
川那部 浩哉

動物のほうは、予測から外れたり、予測できない動きを、必ずしてくれます。



めますね。しかし相手の動物のほうは、ときどきは予測から外れたり、そもそも予測できない動きを、必ずしてくれます。そうするとまた、予測を立て直したりする。おたくの動物園は、そういう楽しみ方もできますね。

小曹 そうなんです。オランウータンなどでも、「この前見たときはこうだった。今日はこんな渡りかたをした。ここでいったん止まったが、あれは何か考えていたに違いない」など、会話が弾んでいます。

生きたものを展示する動物園では、同じようなことは起きているけれど、全く同じことは二度と起こらないわけで、それが生きていると言つことですよ。いつ行つてもオランウータンが渡っているわけではないから、「ボタンを押したら渡っているように見える模型も作れ」と言う人もいますが、絶対にやりたくないのです。「ひよつとしたら渡らないかも知れな

い」というような期待感まで含めて、三〇分後、四〇分後に実際に渡つたときの感動は何事にも代えられないと思うのです。

行動展示はこうして始まった

司会 あのような展示の仕方は、どうして工夫されたのですか。

小曹 先ずは解説板ではなくて口での解説から始まつたのです。寄付を願つて解説版を一所懸命に作つたのですが、誰も読まない、読んで貰えないのです。そこで毎日飼育係が、わら半紙に今日の様子を、「誰々は機嫌が悪い」など、その日その日の動物たちの様子を書いたものを持って、外に出てしゃべつたのです。

ところが飼育係の中に一人だけ、たいへん口下手な男がいたのです。人前では震えて話せない。そこで、「見てください。こういうことをするのがハナグマなんです」と言つた。木の枝の細い先まで

行って、臭いを嗅ぎながら餌を探す運動能力はすごいものですから。そして、「このようにしてバナナを探して取って食べるのがアカハナグマの行動パターンです」と。しゃべるのはたったそれだけで、あとはアカハナグマが自分でずっとそれをやっているわけです。それを見ていた他のものが、あれなら俺のところでできるというので、「こういうことをやるう」と、ああいうことをやるう」と、みんながさまざまに工夫し始めたのです。

旭山動物園の一番の特徴？

川那部 おたくの展示の仕方は、「行動展示」という名前で呼ばれ、いまや一世を風靡していますが、あらゆるところで直ぐに真似もされている。だからどの程度の期間、その独自性を持ち続けられるものかと、いささか不謹慎に考えていたのですが、実際に眼で見、また今のお話を伺って、これはまだまだしばらく続きそうだと感じました。

それは、旭山動物園の飼育員などの方々が、みんなそれぞれ不断に発明していらっしやる。装置が次々に大きく変わらなくともこれなら来てくれる人々につながる新しいものを見せることが出来る。だから、この現象はかなり長く持つな、と思えました。

小菅 様々な工夫と展開は、飼育係がそれぞれやっているのです。それも、お客さんのためにやっ

ているのではなくて、そうしないと、そもそも動物のほうに飽きてくる。動物の方が先に飽きてしまつて、見向きもしくなくなります。別のことをやってやれば、新しいことだから動物がまた楽しく暮らせます。つねに動物が幸せを感じるような展示、それが重要だと思つていっているのです。

動物園は地球を救う

司会 動物園の役割についての考えを、こちらで聞かせて下さい。

小菅 動物園は、博物館の一つであり、生きた野生動物を展示するものです。動物園での仕事は、ほんとうのところたいへん苦しい。毎日毎日うんこ掃除・おしっこ掃除、餌も毎日捕りに行く。生きた餌を食うものには、生きたままのをやらないといけない。だから、目的がはっきりしていないと、続けることはできません。それでは、何のためにやっているのか。この魅力的な動物が、いま地球上ではこういふ状態で、行く行くは絶滅してしまつて、「ほんとうにそれでいいのでしょうか」というメッセージを伝えるためだと考えています。動物園の活動によって、多くの人に野生動物の魅力を伝え、自然環境のすばらしさや重要さを伝えることができれば、人間も愚かではない筈だから、きつと共存の道をとるだろう。自然が残され、地球が救われ、その結果、人類も

救われるという活動をしよう、互いに言いきかせているんです。



6月4日、旭川市旭山動物園にて



対談当日、琵琶湖博物館B展示室にて

これからの旭山動物園

司会 今後の計画を、お話いただけますか。

小菅 すぐやるのは、オオカミです。北海道では今、農地や林地に被害を与えるからと、エゾシカが悪者になっていきます。しかし先輩たちは、エゾシカなどをコントロールしてくれるオオカミを、絶滅させたのです。それも国策として、たった三十年でなのです。それを反省するた

めにも、オオカミの実態を、決して人を襲うような動物ではないことを、しっかりとアツピールしないといけないのです。実は、水族館にも手を出そうと思つています。それも、石狩川水系をやりたいのです。ペンギンやホッキョクグマやアザラシをやつたのも、ほんとうは、旭川と地球を結びつけたかったからなのです。例えばアザラシの展示では、「北の港を再現した展示ですが、自然界にはたくさんあつて、ここには全く無いものがあります」と、職員が話すのです。「なんだと思いますか、それはごみです」と続けます。大量のごみがアザラシをどれだけ痛めつけているかを、知って貰うためです。

旭川市民の暮らしが、地球の隅々まで影響を与えている、それを展示しよう、スタートしたのです。いちばん遠いところにいるペンギンから始めました。石狩川水系は、その連なりの旭川のいちばん近いところ、森と海をつなげて、いろんな生きものの生きかたを展示する。それが石狩の海を豊かにし、北極・南極にまでつながっている。だから、旭川は地球全部に責任があるのですよ」というメッセージを発信したいのです。

川那部 期待しています。琵琶湖博物館の水族展示も、いや、生きていないものを展示している他の部分についても、そちらに負けないように、いろいろやらなければいけませんね。

旭川市旭山動物園園長

小菅 正夫氏

1948年北海道札幌市生まれ。北海道大学獣医学部を卒業後、旭川市旭山動物園に入り、1995年以後、同園長。職員とともに動物の行動展示を考案するなどして、廃園も噂された動物園を入園者数で日本一の人気動物園とした。



全く同じことは二度と起らないわけで、それが生きていけると言うことですよ。